

2023・2024 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書



2025

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

例言

- 1 本冊は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が2023・2024年度に実施した考古学実習の調査報告書である。
- 2 考古学実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学専攻教授）、谷崎仁美（同非常勤講師、2023年度）、奥村茂輝（非常勤講師、2024年度）が担当した。
- 3 本文の執筆は、各実習担当者と受講者が行い、文責を文末に示した。
- 4 本書の編集は、担当教員の協力のもと、國下多美樹が担当した。
- 5 表紙の写真は、夏季考古学実習として実施した周山2号墳の発掘調査風景である。2号墳は5世紀頃の方墳で2023年度の調査によって葺石が明確に発見された。写真はこれを観察、図化する技術を学ぶ学生のカットである。
- 6 なお考古学実習の一貫として、京都市立京北文化遺産センターで展示会を実施した。その内容の詳細は、既に公表している企画展「周山古墳群の発掘」パンフレット2023年を参照されたい。

目 次

I	2023 年度考古学実習の概要	(2)
II	2024 年度考古学実習の概要	(4)
III	考古学実習調査報告・坂下勝美採集遺物の整理報告実習（その2）	(5)
IV	考古学実習調査報告・大学保管採集遺物の整理報告実習	(16)



写真1 周山2号墳全景（2023 年度調査区、北東からドローン撮影、杉山洋氏撮影）

I 2023 年度考古学実習の概要

1 目的と概要

2023 年度の考古学実習は、考古学的調査・研究に不可欠な基礎的技術である、遺跡の調査法、遺構の検出と記録、遺物の観察と記録、報告書作成までの一連の過程、史跡の保存・活用を実践的に学び、考古学的なモノの見方、記録法を身につけることをねらいとして実施した。特に、フィールドワークを多く行った。

3 人の教員によるチェーンレクチュアで、先史時代～近世までの遺構・遺物について基本的知識と方法の学習を実践的に学修した。夏期は、京都市右京区京北町で古墳の調査を実施した。

実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学教授）、谷崎仁美（同非常勤講師）が担当した。また、ティーチングアシスタントとして鎌田雄介（修士1回）の協力を得た。実習参加者は、下記の通りである。

〔文化遺産学専攻（2回生）〕 阿江佐知子・青木悠・池田天・諫本凌太郎・上村祥太・梅津幸太郎・永立明利・大崎留果・大下未結・大田悠月・岡本涉聖・河村萌花・木下珠理・工藤麗奈・昆成見・齊藤宗一郎・坂元美天・尻池千紗・鈴木さくら・箭野颯真・園田風星・高尾悠介・高垣柚花・辻成実・出島奨・寺島涼平・寺矢拓斗・中野聡志・中村京香・西川大陸・西村侑花・根本力也・長谷川咲弥・馬場菜摘・濱口葵・原田しいな・坂東佳達・匹田海大・廣橋真於・藤支大道・藤田勇雅・藤原菜穂子・真鍋倅生・水上采音・矢田有沙・渡辺早希、

〔文化遺産学専攻3回生〕 大川由翔

〔日本史学専攻（2回生）〕 奥田希々香

〔仏教学専攻（2回生）〕 八野美桜里

以下、各実習の概要について述べる。

2 実習の内容

〔1〕先史時代調査法

考古資料の形、器表面に残る痕跡は何を意味するのかについて、深草遺跡の弥生土器・石器、陶器産須恵器の実物による学修を行った。その後、スケッチ、遺物実測法について実践的な講義を行った。

○弥生土器の見方と解釈

深草遺跡の中期弥生土器を使って、弥生土器の種類、形、技法、を実物を観察しスケッチする、文様の拓本を採る実習を行った。また信楽焼の陶土を利用して回転台上で土器表面に文様を施すことで、文様が痕跡として残されたのかを考えた。（國下）

○古墳時代遺物の見方と解釈

須恵器の実測と金銅製魚佩（藤ノ木古墳出土品をモデルとした復原品）の観察を行った。須恵器の実測は、陶器産須恵器の実物の杯身・杯蓋の実測図を作成した。この図面と編年図（田辺編年・中村編年）を対照して須恵器の型式を比定し、実際に観察・実測した遺物の編年的位置を確認した。金銅製魚佩の観察は、古墳時代彫金技法の種類を学修したうえで、復原品を観察し、写真や図面に表現されている技法の実際を確認した。（木許）

○飛鳥・奈良時代遺物の見方と解釈

大学保管の飛鳥・奈良時代須恵器を利用し、古墳時代から飛鳥時代に置ける食器文化の変化を学んだ。

〔2〕発掘調査実習

発掘調査の目的、方法についての講義を経たのち、調査参加への心構えについて講義し、調査開始までに測量実習を行った。（國下）

〔3〕古代調査法

前期は、瓦の観察法やスケッチ、拓本の方法を学んだ。観察法は、パワーポイントの写真や本学所蔵の平川廃寺（京都府城陽市）出土瓦を用いた。感染症対策として一定の距離を保ちながら、実際に瓦に触れて細部を観察し、文様や製作技法について意見を出し合った。また、帝塚山大学附属博物館（奈良県生駒市）の展示を見学させていただき、授業で修得した観察視点に注意しながら、遺物スケッチを行った。拓本は、本学東麓建替え工事に伴う発掘調査で出土した近世瓦を用いた。

後期は、デジタル図化の方法を学んだ。前期に各自作成した拓本を Adobe Photoshop を用いて加工したり、遺構平・断面図、遺物実測図を Adobe illustrator を用いてデジタルトレースしたりして技術の習得に努めた。（谷崎）

〔4〕遺構・遺物等実測図の作成実習

○遺構実測の実習

遺構実測は、大宮学舎北麓や南麓などの外構に明治期の煉瓦敷が遺存していることを受講生で確認したうえで、本館北側の渡り廊下部分に現在復原的に設置されている煉瓦敷を遺構として実測した。これは、渡り廊下に屋根が架されていることで雨や直射日光の影響を受けにくいことから、天候や熱射病等に左右されないで実習をスムーズに行うための措置である。受講生を3～4名で1班として編成し、各班で1/20の平面図を作成した。（木許）

○デジタル図化の実習（遺跡分布図の作成）

デジタル図化の基礎として、スキャナーや解像度など画像データを扱う際に必要な基礎知識を学修した。そして、地図データをソフト（イラストレーター）上に配置し、必要な遺跡の範囲や位置をトレースしていくことで、遺跡分布図の作成方法を学んだ。この実習を通じて、必ずしも遺跡分布図でなくても、卒業論文などに使う挿図作成の基礎技術を習得できるように努めた。

（木許）

〔5〕夏季発掘実習

2023年8月17日（木）～8月31日（木）、京都市右京区京北下町折谷地内（京都市立京北小中学校内）に所在する周山2・4号墳の発掘調査を実施した。周山古墳群は、古墳時代中期から後期の古墳群で本学が継続調査をしている。今回は、2号墳の北裾、東裾とともに墳丘外表の葺石を良好な状態で検出することができた、その成果をもとに地元説明会、また過去の成果を総合して京都市立京北文化遺産センターで展示会を行った。現地では京都市立京北小・中学校、京北の文化財を守る会をはじめ地元の方々の多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。詳細は『周山2・4号墳発掘調査報告書』龍谷大学文学部、2024年を参照されたい。（國下）



写真4 周山1・2号墳葺石礫種調査風景、調査指導は中塚良氏（西から）



写真5 周山中学校の見学風景・周山4号墳解説は大学院生が担当（北東から）



写真2 周山2号墳墳丘東裾の基底石（北西から）



写真3 周山2号墳ミーティング風景（東から）



写真6 京都市立京北文化遺産センターでの展示会

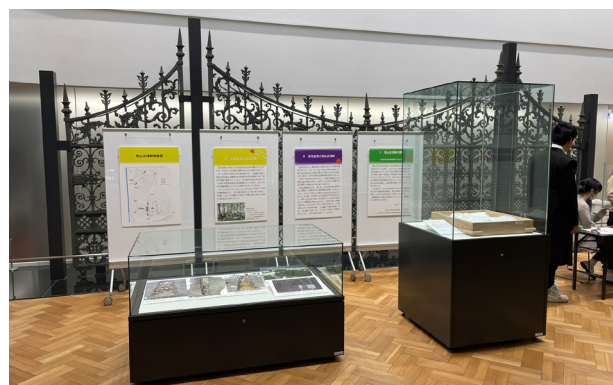


写真7 龍谷大学大宮学舎東翼ラウンジでの展示

II 2024 年度考古学実習の概要

1 目的と概要

2024 年度の考古学実習は、例年同様に考古学的調査・研究に不可欠な基礎的技術である、遺跡の調査法、遺構の検出と記録、遺物の観察と記録、報告書作成までの一連の過程、史跡の保存・活用を実践的に学び、考古学的なモノの見方、記録法を身につけることをねらいとして実施した。

3 人の教員によるチェーンレクチュアで、先史時代～近世までの遺構・遺物について基本的知識と方法の学習を実践的に学修した。夏期は、京都市右京区京北町で古墳の調査を実施したが、今年度は台風の影響を受け多くの受講者が現地に赴くことができなかったことを付記しておく。

実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学教授）、奥村茂輝（同非常勤講師）が担当した。また、ティーチングアシスタントとして鎌田雄介（修士 1 回）の協力を得た。実習参加者は、下記の通りである。

〔文化遺産学専攻 2 回生〕有賀悠葵、石田日菜子、今津穂香、岩尾侑真、上江洲遥斗、上田麻那李、内麻祐人、岡本晃、音羽香澄、小島七海、柑谷朋哉、木村未生、木和田快、金城利輝、糸雄大、坂井志乃慧、櫻井成騎、信田拓翔、庄司彩乃、菅原颯太、杉山彩輝、関谷彩音、大東ゆり、竹田頼生、多々良富郁、谷内奎吾、谷野葵帆、鳥越愛梨、長江諒太、長尾真帆、中嶋大遙、中杉あいり、成田蒼司、西村琉来、野間皐生、平野葵依、福本太義、松本勘汰、三浦航太朗、水野七海、道畑湧喜、三村紗愛、宮崎さくら、宮本凱成、村上征太郎、村山孝成、安川仁菜、安國有真、山口匠、山田ひなた、山中楓大、山野邊千晴、吉中俊輔、和田守彩夏

〔日本史学専攻 2 回生〕寺尾重人

2 実習の内容

〔1〕先史時代調査法

○弥生時代遺物の見方と解釈

深草遺跡の弥生土器を用いて、土器の観察、記録の基本的な方法を実習した。弥生土器は中期の壺の文様片を利用し、スケッチ、採択を行った。また、文様や調整の復原原体を使って、土器の表面の痕跡からどのような工具を使用していたのかを実習的に学習した。（國下）

○古墳時代遺物の見方と解釈

陶器産須恵器の実物の杯身・杯蓋を用いて、古墳時代の須恵器の観察と実測を行った。各自が作成した実測図と実際の遺物を編年図（田辺編年・中村編年）に対照して須恵器の型式を比定し、実際に観察・実測した遺物の編年的位置を確認した。（木許）

〔2〕発掘調査実習

発掘調査の目的、方法についての講義を経て、調査開始までに測量実習を行った。（國下）

○遺構実測の実習

遺構実測実習は、大宮学舎北翼や南翼などの外構に明治期の煉瓦敷が遺存していることを受講生が確認したうえで、本館北側の渡り廊下部分および南翼入口部分に、現在復元的に設置されている煉瓦敷を遺構として実測した。受講生を 3～4 名で 1 班として編成し、各班で 1/20 の平面図を作成した。（木許）

○デジタル図化の実習（遺跡分布図の作成）

デジタル図化の基礎として、スキャナーや解像度など画像データを扱う際に必要な基礎知識を学修した。そして、地図データをソフト（Adobe illustrator）上に配置し、必要な遺跡の範囲や位置をトレースしていくことで、遺跡分布図の作成方法を学んだ。この実習を通じて、必ずしも遺跡分布図でなくても、卒業論文などに使う挿図作成の基礎技術を習得できるように努めた。（木許）

〔3〕古代調査法

○古代～近世土器・陶磁器、その他遺物の調査法

飛鳥時代以降の土器、陶磁器、石製品などを分類することで遺物の観察や学修を行った。

○古代瓦の調査法、及び測量図・遺物実測図のデジタル化の実習

前期は、飛鳥時代から平安時代までの瓦の紋様変遷について学んだ。その知識をもとに、奈良市内の寺院跡（横井廃寺）から出土した軒瓦群について、それぞれの瓦の製作年代をグループで検討しその結果を発表した（写真）。また、前期終了時には帝塚山大学附属博物館（奈良県生駒市）の展示を見学し、軒瓦紋様のスケッチを行った。

後期の初めには、本学所蔵の平川廃寺（京都府城陽市所在）出土瓦を用いて、拓本・実測の実習をお

こなった。受講生は一連の講義を通じて古代の瓦の紋様が、仏像や寺院建築物の装飾と同じ変遷を辿ることを学んだ。その後、遺物・遺構の測量図をデジタル化する方法を習得した。具体的には、先の実習において各自が作成した拓本・実測図をスキャナーを用いてデータ化し、AdobePhotoshop・AdobeIllustratorを用いてデジタルトレースし、卒論や書籍出版物等に使用できる図版の作成方法を学んだ。

(奥村)

○平安宮跡の踏査と京都アスニー展示の見学

2024年12月1日(日)、平安宮大極殿に集合、京都アスニーで平安宮と平安京の全体像をイメージしたのち、平安宮大極殿跡、内裏跡を踏査した。調査によって明らかになった遺跡がどのように復元整備されているのかを現地で学修した。(國下)

○遺物写真撮影・文化財写真撮影実習

写真撮影の基本的な技術を実習した。カメラの種類、撮影データの種類、遺物撮影、屋外撮影の留意事項を実践的に指導した。(國下)

○土器実測実習

今年度は、土器実測の実習時間を増やして全員が一定水準の土器実測を行うことができるように指導を行った。(國下)



写真8 遺構実測の実習



写真9 瓦製作年代を検討するグループ学修

Ⅲ 考古学実習調査報告・坂下勝美採集遺物の整理報告実習(その2)

本報告は、2019年10月に乙訓文化遺産を守る会会員の坂下勝美氏(1941～)より、本学文学部考古学実習室に寄託された考古資料の調査報告である。

本資料は、同氏が京都府、大阪府、長野県の遺跡包蔵地付近での工事等で攪乱された地表面で採集されたもの、あるいは関係者から収集した資料で、再収納されたコンテナ4箱分(報告分1箱含む)である。旧石器時代から近世に至る資料がある。これらの資料については、実習受講生のうち、希望者が実測、写真撮影、観察を行い、報告してきた^(註1)。

今回報告する資料は、2022～2023年度受講生が手がけた考古資料である。2022年度は、倉本清颯、佐々木拓人、池浦里咲、2023年度は、和田一希、大下未結、齊藤宗一郎、高垣柚香、濱口葵、鎌田雄介が資料化を行った。

註

(1) 報告完了分は、下記の文献で報告しているので、併せ

て参照されたい。國下多美樹・前田詞子「長岡京跡および周辺で採集された軒瓦」(『古代文化』第72巻第3号、古代学協会、2021年、國下多美樹・菊池万理・川添みのり・大神紅子・古林颯、鎌田雄介「考古学実習調査報告・坂下勝美採集遺物の整理報告実習について」『考古学実習・文化財実習報告書』龍谷大学文学部考古学実習室、2021年、p.p.22-34



写真10 坂下勝美採集遺物収納状況

はじめに

本学歴史学科文化遺産学専攻では、考古学実習の一環として寄託等で本学に保管された採集品の紹介を行ってきた（國下、前田 2020・國下他 2022）。寄託品のうち、乙訓の文化遺産を守る会の坂下勝美氏が京都府長岡京市の井ノ内遺跡において採集した須恵器の杯蓋・杯身について資料紹介を行うものである（註1）。

1 井ノ内遺跡及び採集地の概要

長岡京市北西部に位置する井ノ内遺跡は縄文時代から古墳時代および奈良時代から近世にかけての複合遺跡である（図1、長岡京市史編さん委員会 1991）。おおよそ東西 900m、南北 600m の範囲が遺跡と推定されている。また遺跡内には小西古墳群、井ノ内稲荷塚古墳、井ノ内遺跡から北西には井ノ内車塚古墳が存在する。井ノ内稲荷塚古墳は後期の前方後円墳であり、過去の調査から後円部に横穴式石室、前方部に木棺直葬が確認されている（長岡京市埋蔵文化財センター 1996）。井ノ内稲荷塚古墳、井ノ内車塚古墳ともに当地域の首長墓として考えられている。遺跡は西から東に傾斜する扇状地に立地しており、主な古墳時代の遺構としては、竪穴住居や溝、土坑などが確認されている。また採集地点の北東にある京都西山高等学校内第2グラウンドを発掘調査した際に多数の竪穴住居跡が確認された。その密集度から、集落の中心部であったと予測されている（長岡京市史編さん委員会 1996）。

2 採集資料について

ここで紹介する資料が採集された場所は長岡京市井ノ内朝日寺地内に所在する京都府立向日が丘支援学校内である。1966 年頃に行われた同校地内の施設工事の廃土等から、コンテナ 1 箱分の遺物が採集されている。その内容は、古墳時代須恵器の杯蓋、杯身、高杯、飛鳥・奈良時代の須恵器の破片、長岡京期・平安時代の須恵器の破片と甕の破片などである。ここではそのうちの須恵器 2 点の特徴を述べていきたい。

須恵器杯蓋（1）天井部の残存率は約 50%、口縁部の残存率は約 20% である。復原口径は 12.8cm、器高 4.6cm である。形態の特徴は、天井部は丸みを帯びてふくらみ、口縁部はわずかに外側に開いている。口縁端部内側は稜線により面をなしている。天井部と口縁部の境界は突出して甘い稜をなしている。技法の特徴は、天井部の 3 分の 2 の範囲をヘラケズリ、天井部の 1 / 3 と口縁部をロクロナデで調整している。天井部は、およそ 1cm 間隔でヘラケズリ痕が確認できる。胎土は緻密、焼成は良好で、内外面は淡黄灰色。

須恵器杯身（2）口縁部の残存率は約 20%、底部の残存率は約 15% である。復原口径は 12.6cm、

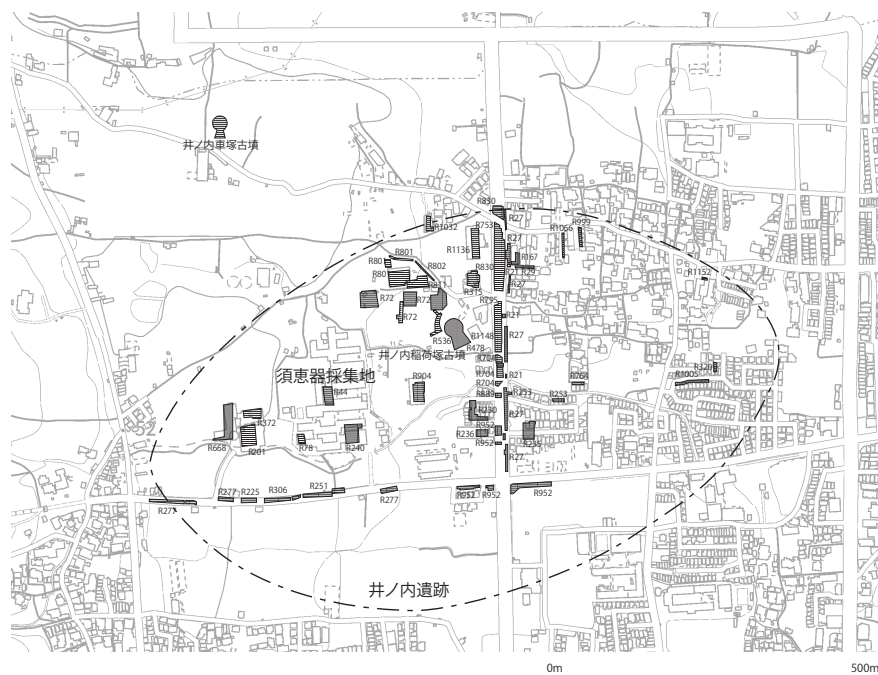


図1 井ノ内遺跡の発掘調査地点と須恵器採集地点

器高は 5.7cm である。形態の特徴は、口縁部の稜線は甘い。立ち上がりは内方へ傾斜している。受け部は外上方へ伸び、端部は丸みを帯びている。体部は丸みを帯び、底部は平らである。技法の特徴は、底部の 2 / 3 程度の範囲でヘラケズリ、体部と立ち上がりはロクロナデで調整している。またヘラケズリにはおよそ 1 cm 間隔の痕跡が確認できる。ロクロ回転方向は反時計回り。胎土は緻密であり 1 mm 程度の長石を多数含み、2 mm 程度の石英を若干含む。焼成は良好、内外面共に灰色、断面は一部暗赤褐色を呈す。

形態、技法、法量からいずれも TK23 型式と考えられる。

おわりに

須恵器 2 点の特徴を述べてきたが、古墳時代中期後半の井ノ内遺跡から出土した須恵器と比較検討を行うことができなかった。この遺跡の性格はいまだに不明な点が多いが近年の発掘調査では後期の竪穴建物跡が発見されている。今後調査成果が充実した際に、井ノ内遺跡出土品とこの須恵器を比較検討できればと考える。

註

(1) 本稿は 2021 年に乙訓の文化遺産を守る会にて発表を

行った原稿に加筆・修正を行ったものである。

引用文献

國下多美樹・前田詞子 2020 「長岡京跡および周辺で採集された軒瓦」『古代文化』第 72 巻第 3 号 古代学協会 p.p.404-413。

國下多美樹・菊池万里・川添みのり・大神紅子・石田琴子・古林颯・鎌田雄介・木許守 2022 『考古学実習・文化財実習報告書第 4 集』龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 p.p.22-36

田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群 I」平安学園考古学クラブ

長岡京市史編さん委員会 1991 「長岡京市史 資料編一」長岡京市役所 p.p.262-265 p.p.266-268。

長岡京市史編さん委員会 1996 「長岡京市史 本文編一」長岡京市役所 p.p.193-220。

図出典

図 1：地理院地図 /GSI Maps/ 国土地理院 1/5000 「長岡京市」を基に筆者作成。

図 2- 1・2：筆者作成、図 3- 1・2：筆者撮影。

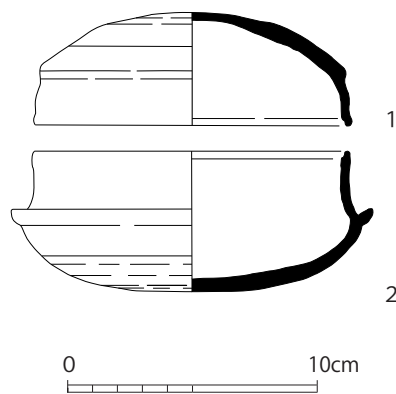


図 2 井ノ内遺跡採集古墳時代須恵器一 1



図 3 井ノ内遺跡古墳時代須恵器一 2

Ⅲ－２ 井ノ内遺跡の古墳～中世土器類

大下未結、齊藤宗一郎、高垣柚香、濱口葵（文化遺産学専攻3回生）

採集年月日 正確な年月日は不明である。坂下勝美氏への聞き取りでは1966年（昭和41）頃あるいは1980年の京都府立向日が丘支援学校の建設工事が行われている時に採集したとのことであった。1966年頃とすれば学校建設時、1980年とすればグラウンド東側に訓練棟が建設された同年8月4日から9月20日頃と推測できる。

採集地点 京都府長岡京市井ノ内朝日寺11（現京都府立向日が丘支援学校）付近である。この辺りは井ノ内遺跡として周知されている。

現在、西側の西山山地から派生する丘陵部に向けては竹林が形成されている。井ノ内周辺では、主に田畑として主に土地利用されており、西から東に向かって下降している地形を利用した用水路が多く流れている。筆者らが現地踏査した時期、京都府立向日が丘支援学校は、解体工事中であり、別の場所に仮校舎として運用をされていた。なお、その後、新校舎の発掘が行われている。

遺物の観察

須恵器杯蓋（1） 口縁部下位1／4が残存する。頂部外面を回転ヘラケズリ、口縁端部から2.7cmまでロクロナデ。ロクロナデの範囲では0.5cm程度の凹みが3箇所ある。内面はロクロナデ。胎土は緻密で焼成は硬質である。色調は、外面が10YR5/1褐灰色、内面、5Y5/1灰色、断面は2.5Y5/1黄灰色である。口径13.8cm、残存高3.0cm。TK209型式と推定される。

須恵器有蓋高杯（2） 杯部の1／7・脚部の1／5が残存している。短脚で一段方形透かしが穿たれる。杯部下位は、扁平な底部から丸みを帯びる。脚部は裾部から内上方に短く立ち上がる。裾部は、外面に凹みを有し上端が突出している。残存部の杯身部分中央の1.5cmの範囲で回転ヘラケズリ、以外はロクロナデ調整。脚部には2cm幅のカキメ（約6条/cm）が施される。焼成は硬質で、内外面は2.5Y6/1黄灰色、断面は7.5Y5/1灰色を呈す。底径は11.0cm、残存高は7.9cmである。杯部の形態、ヘラケズリの範囲、脚部の形態等からMT15型式と推測される。

須恵器壺（3） 口縁部片である。口縁部は、外上方に湾曲して立ち上がり、端部は外傾する平坦面をつくる。内外面はともに回転ナデ調整。胎土は緻密で、焼成は硬質である。色調は内面7.5Y1/7灰白色、外面10YR1/6褐灰色、断面2.5Y1/7褐白色である。口径23cm、残存高6.2cmである。

須恵器杯（4・5） いずれも口縁部の小片である。口縁部上半は、外上方に直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整である。（4）の胎土は緻密で、焼成は硬質である。色調は内・外面、断面ともに7.5Y1/5灰色である。口径15.2cm、残



写真2 井ノ内遺跡の遺物採集地点（2024年6月8日、齊藤・濱口・大下踏査時）

存高 4.7cm、。(5) の胎土は緻密で、1mm 以下の長石を含む。焼成は硬質である。色調は、内面 N/6 灰色、外面 5Y1/6 灰色、断面 7.5Y1/6 灰色である。口径 17.8cm、残存高 4.9cm である。いずれも長岡京期前後の所産である。

須恵器杯 (6) 底部片である。内外面回転ナデ調整。胎土は緻密で、焼成は硬質。色調は、内面 5y1/6 灰色、外面 2.4Y1/6 黄灰色、断面 N6/0 灰色である。

須恵器杯 A (7) 口縁部である。内外面はともにロクロナデで調整されている。胎土は密で焼成は良好である。色調は、内外面ともに灰色 (N6/1)、断面灰色 (7.5Y6/1) である。口径 14.4cm、残存高 2.8cm である。

須恵器碗 (8) 口縁部の約 1/8 が残存する。斜め上方に立ち上がる。口縁部近くで屈曲し、端部は丸くおさめる。内外面ヘラケズリ調整。胎土は密で砂粒はほとんど含まない、焼成は良好で、内外面・断面は 7.5Y 灰色を呈する。口径 14.0cm、残存高 1.7cm。亀岡市篠窯で碗 B - I に分類され、黒岩 1 号窯のⅢ - 2 期 (10 世紀第 3 四半期) の所産であろう^(註1)。

須恵器碗 (9) 底部片である。糸切り底を有するもの。内外面回転ナデ。胎土は緻密で 3mm までの長石を含有する。やや軟質焼成で、7.5Y7/1 灰白色である。

須恵器杯 (10) 底部片である。内外面回転ナデ。胎土は緻密で、硬質焼成。外面 7.5y7/1 灰白色、内面・断面 7.5y6/1 灰色である。

須恵器壺 (11) 体部下位片である。形態は全体的に丸みというよりも膨らみを帯びているという印象を持つ。調整は内面がナデ、外面は上位の 4 割ほどが回転ナデ、以下はナデ。胎土は 1mm 程度の長石を含み緻密。焼成は硬質である。色調は外面と断面は N7/1 灰白色、内面は、10YR7/1 灰白色である。奈良時代から長岡京期前後の所産であろう。

須恵器甕 (12 ~ 16) 口縁部片 (12)、頸部片 (13・14)、体部片 (15・16) がある。

口縁部片 (12) は、外湾して端部が屈曲し受口状に作るもの。内外面は回転ナデ調整。胎土は緻密で、0.5mm 大の長石、黒色粒を多量に含む。色調は内面、外面ともに 10YR1/6 褐灰色、断面 2.5YR1/6 黄灰色である。残存高 6.6cm。長岡京期前後の所産である。

頸部片 (13) は、内湾気味の肩部から頸部が強く上方に屈曲するもの。内面は上位から回転ナデ、

同心円当て具痕である。外面は上位を縦位のタタキ (4 条 /cm) 後一部ナデ調整。胎土は緻密で、0.5mm 大の長石、黒色粒をやや多く含む。外面に灰白色の自然釉が付着している。焼成は硬質である。色調は内面 N/4 灰色、外面、断面ともに 7.5YR1/6 褐灰色である。残存高 6.6cm、厚さ 1.8cm である。

体部片 (14) は、内面が同心円当て具痕、外面は格子目タタキが残る。胎土は緻密で、焼成は良好。内・断面は 5Y6/1 灰色、外面は 7.5Y7/1 明褐色を呈する。残存長 6.4cm、厚さ 1.2cm である。

体部片 (15) は、形態と内面の同心円当て具痕の状態から底部と推測した。外面は横位の平行タタキ (3 条 /cm) を施す。胎土は緻密で、平均 0.5mm 大、最大 3mm 大の長石少量を含む。焼成は硬質である。色調は内面 5Y1/6 灰色、外面 N/6 灰色、断面 N/5 灰色である。残存長 10.3cm、厚さ 6.0cm である。内面下位に白濁色の物質が付着している。

(16) の内面は同心円当て具痕、外面はタタキ後カキメが上部 1cm あり、1.6cm 開けて 2.2cm 残る。胎土は緻密で、焼成は良好。内面は N6/1 灰色、外面は 7.5Y6/1 灰色、断面は 5Y6/1 灰色を呈する。残存長 6.3cm、厚さ 0.7cm である。古墳～平安時代の所産であろう。

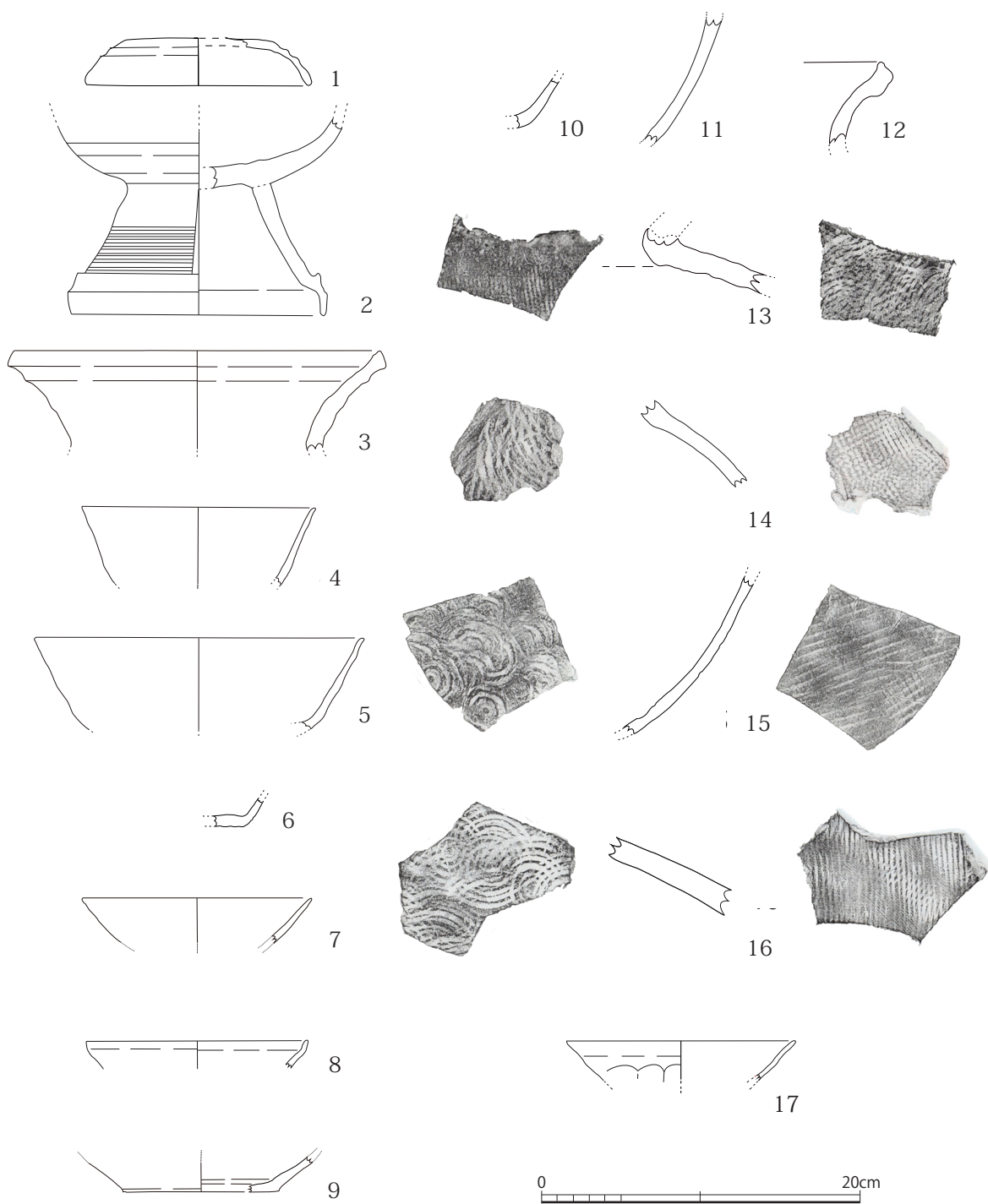
瓦器碗 (17) 口縁部の小片である。斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。内面はヘラケズリで、外面は口縁端部から 1.9cm の範囲をヘラケズリ、それより下位は指おさえて調整している。内外面の炭素の吸着は良くない。胎土は緻密で、焼成は良好。内外面・断面は 10Y8/1 灰白色を呈する。口径 14.4cm、残存高 2.5cm であるが小片で確定は難しい。法量は合わないが技法から和泉型瓦器のⅣ - 2 期前後の所産であろう^(註2)。

執筆分担：齊藤 (1・2・7・9)、大下 (3～6、10、12～15)、濱口 (8・16・17)

註

(1) 岡崎研一「篠窯跡群Ⅱ」『京都府遺跡調査報告書第 11 冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター、1989 年。

(2) 佐藤亜星「畿内産瓦器碗」『新版概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編、真陽社。p.p.187-200



古墳時代須恵器〔杯蓋（1）・有蓋高杯（2）・壺（3）〕

奈良・平安時代以降須恵器〔杯（4～7・10） 碗（8・9） 壺（11） 甕（12～16） 瓦器碗（17）〕

図1 井ノ内遺跡採集遺物実測図－1



写真3 井ノ内遺跡採集遺物－1

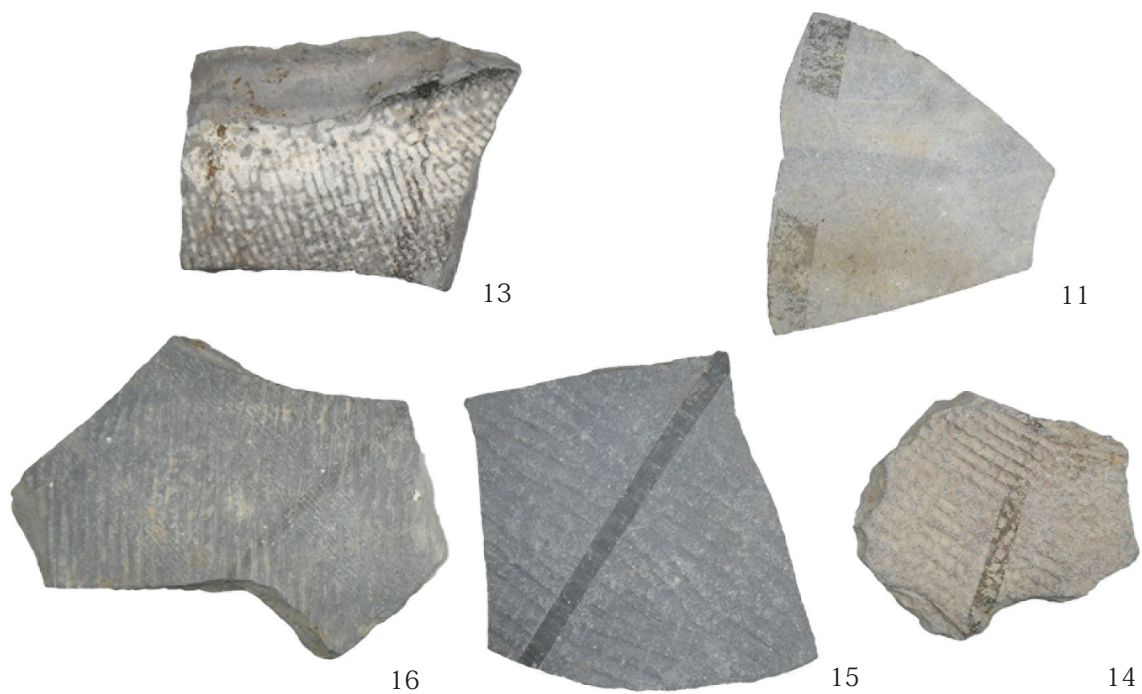


写真4 井ノ内遺跡採集遺物－2

採集年月日 1966 年か 1980 年頃

採集地点 井ノ内朝日寺 11

遺物の観察

（１）は須恵器の壺 L である。口縁部の約 3/8 と体部の約 1/2 が残存する。体部は丸みを帯び、肩部に最大径を持つ。口頸部は外傾してゆるやかに立ち上がり、口縁部上半で水平近くまで外反して短く伸びる。口縁端部は上下に拡張している。内外面ともに回転ナデを施す。体部と頸部は二段接合である。口縁部内面と肩部外面に自然釉 2.5Y8/6 黄色が付着している。胎土は緻密で、長石（平均 0.5mm、最大 10mm）がやや多く、チャート（1mm）を少量含む。焼成は硬質で、色調は内面が N6/0 灰色、外面が N7/0 灰白色、断面が N4/0 灰色である。口径

9.6cm、残存高 16.8cm である。

（２）は須恵器の壺 K である。底部の約 1/2 と体部の肩部までが残存する。平坦な底部から体部が丸みを帯びて外上方へ立ち上がり、張り出した肩部が強く屈曲する。高台は端部が外側に突出し、内端面が接地する。体部内面は回転ナデを施し、底部内面は不調整である。体部外面上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ後に回転ナデ、底部外面はナデを施す。高台は貼り付けられ、回転ナデ調整である。

高台の内側には爪形状圧痕（c 1 類）^{（註 1）} がめぐる。肩部外面と内面見込みに自然釉 7.5Y4/3 暗オリーブ色が付着している。胎土は緻密で、長石（平均 1mm、最大 4mm）を多く含む。焼成は硬質で、色調は内面が N6/0 灰色、外面が N7/0 灰白色、断面が 2.5Y6/2 灰黄色である。残存高 8.7cm、底径は 10.4cm である。

註

（１）國下多美樹「爪形状圧痕を有する土器」『京都考古』第 67 号、京都考古刊行会、1992 年

付記 壺のうち（１）は、形態と法量から長岡京期、（２）は奈良時代の初産と見られる。いずれもⅡ－２で紹介された同期の遺物と関連づけられる。同地点は、長岡京右京三条四坊八・九町に推定され、宅地の性格を反映した資料と言える。（２）は、奈良時代の集落に関係するが、近傍に乙訓園が推定されており、これとの関係で注目される資料である。（國下）

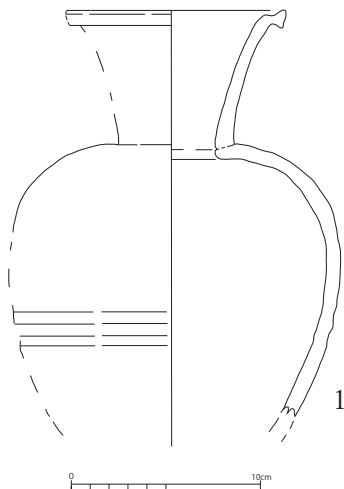


図 5 井ノ内遺跡採集遺物実測図－２



写真 5 井ノ内遺跡採集遺物－３

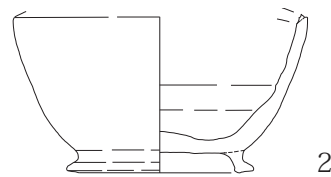


図 6 井ノ内遺跡採集遺物実測図－３



写真 6 井ノ内遺跡採集遺物－４

Ⅲ－４ 大阪市三津屋北１丁目遺跡の中世前期土師器 佐々木拓人（文化遺産学専攻４回、当時）

採集年月日 1991年。月日は不明。

採集地点 ダンボール紙に「神崎川駅神戸川右岸150m 側柱ピット」と記載されている。大阪府豊中市神洲に所在する阪急電鉄神戸線架線内付近（X=-140256、Y=-48453）の側柱ピット工事中に採集されたようである。

採取地点は、大阪市淀川区、豊中市の市境を流れる神崎川の神洲橋付近の河岸に当たる。最も近い遺跡は、南40mの三津屋北1丁目遺跡（中世、散布地）に当たるので、便宜上、同遺跡出土として扱った。神崎川左岸では南70mに中世の城館、三津谷城跡伝承地、南西70mに中世から近世の集落である三津屋北3丁目遺跡、西1.5kmに奈良～中世の宮光寺境内遺跡、西2kmに弥生時代の加島遺跡がある。

一方、右岸域は、北1.3kmに古墳時代初頭の標識遺跡として著名な庄内遺跡、北西1.1kmに古墳時代中期の島江遺跡がある。遺物の年代から、神崎川左岸域に分布している集落跡に関する資料である可能性が高い。

遺物の観察 土師器杯（１）と須恵器杯（２）がある。

土師器杯は、口縁部の1/2強が残存するもの。やや凸凹のある底部から口縁部が斜め外上

方に立ち上がる。口縁端部は屈曲して内側に肥厚する。口縁部下半は丸みをおびる。内面はヨコナデ、外面は口縁部をヨコナデし、底部はナデ調整。外面全面に煤が吸着する。口径15.7cm、器高4.1cm。胎土は緻密で最大3mm、平均2mmの石英、長石、最大4mm、平均2mmのチャートを含む。焼成は硬質。内外面、断面ともに2.5Y8/2灰白色である。

須恵器杯（２）は、口縁部の3/4が残存するもの。扁平は底部から口縁部が外上方に直線的に伸びて端部はひねり出し気味に丸く収める。内面と口縁部はロクロナデ、底部は糸切り。口径12.2cm、器高2.6cm。胎土は緻密で、最大5mm、平均1mmの長石、1～2mm大のチャートを含有する。焼成は硬質。色調は、内外面2.5Y7/1灰白色である。

以上の土器は、中世前期（11世紀後半～12世紀前半）の山陽地方からの搬入品と推定しておきたい。

付記 わずか2点の遺物であるが、遠隔地の土器であることから想像をたくましくすれば神崎川にかつて存在した川湊ないし津に関連する資料であり、中世の瀬戸内海交通と物資流通を考える重要資料になる。（國下）



図7 三津谷屋北1丁目遺跡採集遺物

写真7 三津谷屋北1丁目遺跡採集遺物

III-5 大山崎町・宝積寺の中世軒瓦

倉本清颯（文化遺産学専攻4回（当時）現（株）吉田生物研究所）

採集年月日・地点 軒平瓦のほぼ完形品である。宝積寺境内で造園業を営む向日町在住の方から譲り受けたとの伝聞である。発見年や寺域のどの場所で発見されたかは不詳である。

遺物の観察 瓦当面は、右上が一部欠けたO字形を包むような草文を中心飾りとして、左右に4反転の草文を不均整に施す。

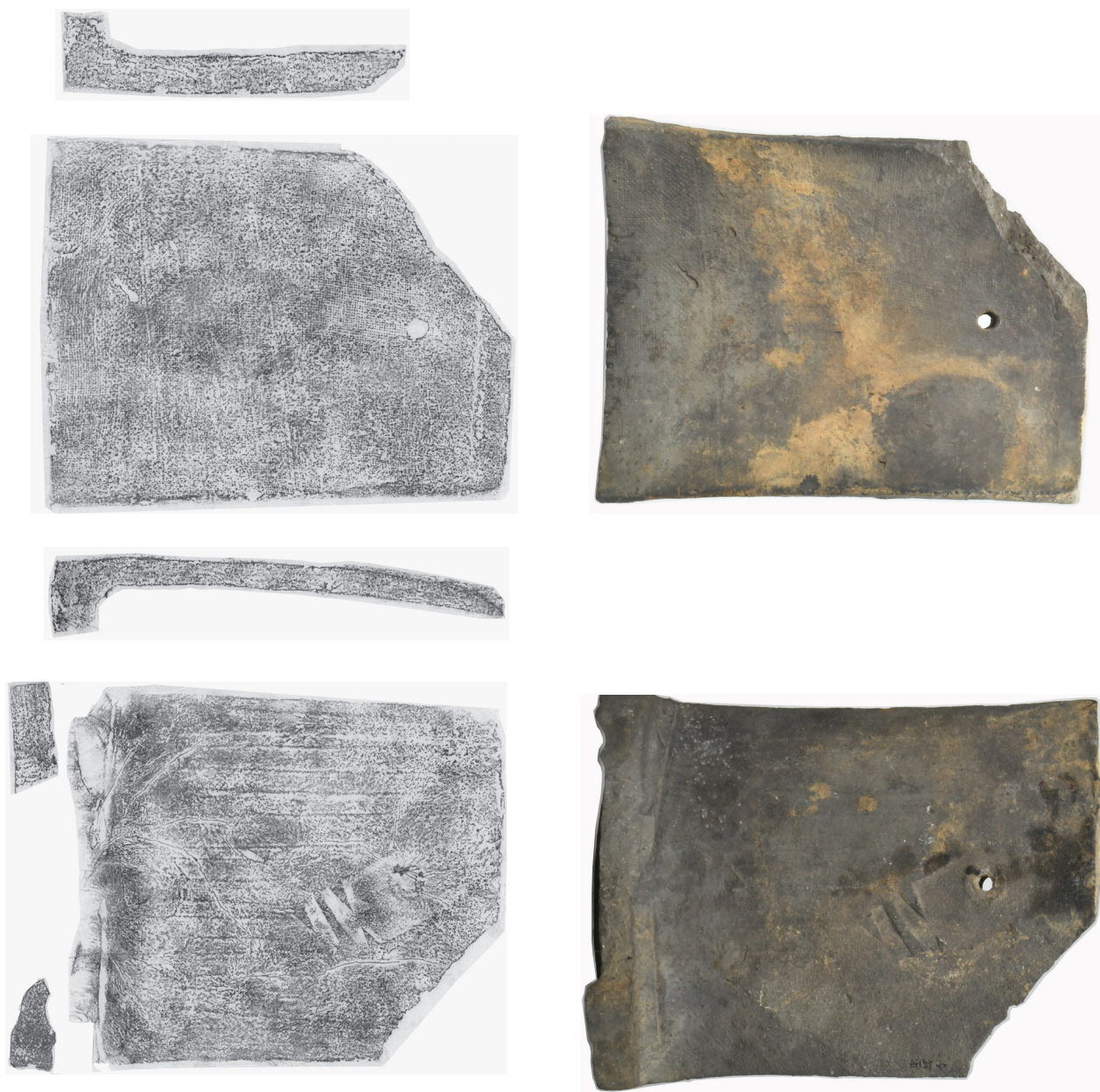
平瓦部凹面は瓦当端から240mmまで不調性（布目痕）で、布端がある。以下タテナデである。55～126mmまでは布目痕また瓦当端から20.4mmに孔径0.7～0.9mmの円孔である釘穴がある。胎

土は緻密で平均0.5mm最大1mm大の長石をやや多く含む。硬質焼成で、凹面10YR6/1灰色、側面7.5Y5/1灰色、凸面の瓦当面から8cmまでN6/0灰色、平瓦部中央は10YR7/4にぶい黄橙色、裾部から6cmまでN3/0暗灰色、断面10YR6/1褐灰色である。

内区の脇区近く、第4反転部の唐草紋は短くほとんど反転しない類例として、御着城出土の唐珠唐草文軒平瓦や姫路城出土の中心三葉軒平瓦がある^{（註1）}。瓦当文様全体から中世の所産と見られる。



図1 宝積寺採集軒平瓦実測図・拓影・写真－1



第2図 宝積寺採集軒平瓦実測図・拓影・写真－2

(註1) 山崎信二 2008『近世瓦の研究』p.p.201・p.202
 の第79図2の唐珠唐草文軒平、p.205の第80図4中心三
 葉軒平瓦など。



第2図 宝積寺採集軒平瓦実測図・拓影・写真－3

IV 考古学実習調査報告・大学保管採集遺物の整理報告実習

山崎城跡採集丸瓦

鎌田雄介（文学研究科修士課程2回）

採集年月日 正確な出土年月日は不明である。

採集地点 遺物が封入された袋には「天王山 山崎城」と記され、当城跡周辺で採集されたと伝わる。
資料の観察 当資料は、丸瓦の玉縁部～丸瓦部の一部を残す断片である。残存長は玉縁部から数えて18.8cmである。丸瓦部凸面は長辺方向（以下、長辺方向を縦と表記）にケズリを施し、その後縦ナデで調整する。玉縁部凸面及び丸瓦部端面は回転ナデで調整するが、玉縁部側縁はケズリで面取りする。

丸瓦部凹面は全体に布目（9×7条/cm）が残り、側縁はケズリで面取りする。玉縁部凹面は縦方向に、丸瓦部は横方向に布のヨレが確認できるため、異なる布を合わせて使用していたと考えられる。また、断面の観察から約6cm幅の粘土帯を玉縁部に巻き付けた後、丸瓦部に厚み約2cmの粘土板を巻き付けたと考えられる。丸瓦部凹面には抜取り縄の痕跡が明瞭に残り、八の字に弧状を描く縄の下に横方向の刺し縫いが確認できる。

胎土は緻密で、0.1cm大の長石・石英を少量、0.1～0.5cm大のチャートを多量に含む。焼成はやや硬質。色調は表面が10YR6/1 褐灰色、断面が10YR7/1 灰白色であり、還元炎焼成で製作されたものである。

歴史的意義 山崎城跡は現在の京都府乙訓郡大山崎町字大山崎小字古城地内に所在する城跡である。南北長期頃の築城と推測され、建武5年（1338）には北朝方の城として、その後応仁文明の乱では東軍方の城として機能していた^{（註1）}。天文年間には細川晴元が築城を行い、当地では時代を跨いで複数回の築城がなされていたとわかる。

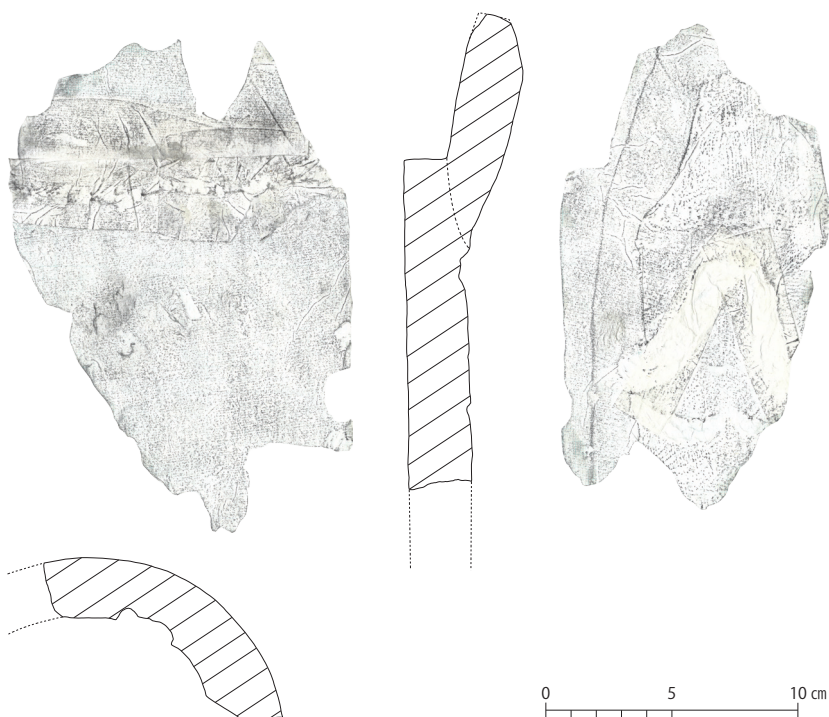
現在当地で明瞭に残る近

世初頭の城郭遺構は羽柴秀吉の築城によるもので、天正10年（1582）に築城され、天正12年（1584）には廃城している。『多聞院日記』天正十年九月二十五日条には以下の内容が記述されている。

順慶上洛、明日山崎財寺域越之、為筑州見廻歟。

天正10年7月17日の毛利右馬頭宛書状の内容から同年7月には築城工事が開始されており、概ね2箇月間で城として機能する程度には築城が進んでいたと考えられる^{（註2）}。短期間ながら大規模な築城が行われた山崎城には多くの工人が動員されたと推測できる。

当資料は羽柴秀吉による築城工事の際に葺かれた丸瓦である。短期間の造瓦ながらも非常に丁寧な調整が確認でき、当該時期にはある程度の品質を保った瓦を大量供給できる造瓦工程が確立されていたものと考えられる。当資料には特徴的なものとして抜取り縄の痕跡が確認できる。抜取り縄は少な



第1図 山崎城跡採集丸瓦実測図・拓影

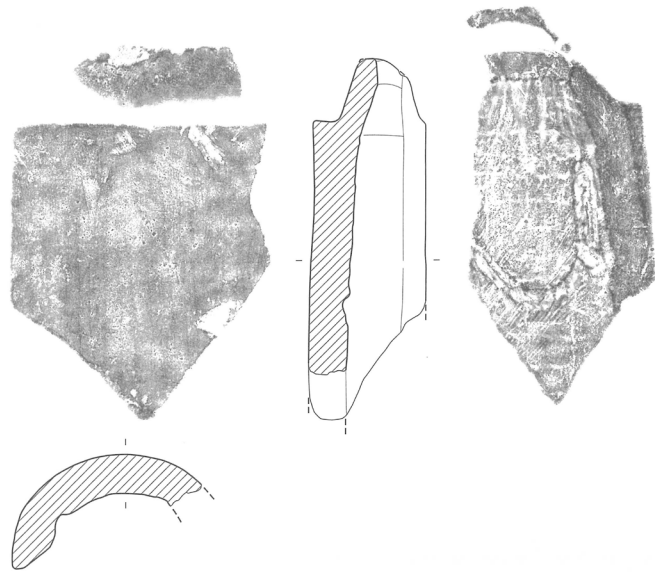
くとも 12 世紀末～13 世紀中頃には使用されており^(註3)、12 世紀～16 世紀末頃までの長期間一般的に用いられた造瓦技術の一つである^(註4)。山崎城跡では近年継続的な調査が実施されており、その際に採集された丸瓦からも抜き取り縄の痕跡が確認できる^(註5)。

当資料とは抜き取り縄の形状が異なり、凸面調整にも差異が認められることから、別々の工人による製作と考えられ、短期間での築城を成し遂げるために多くの瓦工が動員されたと推測できる。また、調査時採集の丸瓦には凹面に A 手法のコビキが確認できる。近畿地方において、コビキは天正 11 年(1583)の大阪城築城時に A 手法から B 手法への転換が行われたと考えられており^(註6・7)、A 手法の丸瓦はそれ以前の製作・供給であったと推定できる。当資料ではコビキの痕跡が確認できないが、A 手法が用いられていたと考えられる。

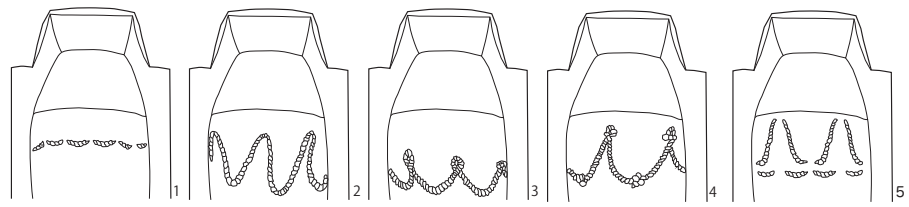
山崎城跡の調査は 1997 年から開始され、近年継続的に実施されているが^(註8～11)、発掘調査は行われておらず、遺物の検討は採集資料に限られる。当資料は当該期の特徴を明瞭に残す優品であり、今は臨むことの叶わない山崎城の荘厳な城郭を偲ばせる貴重な採集遺物である。

註

- (1) 中井均 1983 「山崎城跡の構造と歴史―特に天正期秀吉城を中心に―」『長岡京』第 30 号 長岡京跡発掘調査研究所
- (2) 中井均 1986 「山崎城の構造―天正十年秀吉築城の構造と城郭史的意義―」『長岡京古文化論叢』同朋社出版
- (3) 小林謙一・佐川正敏 1989 「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊弉留我：法隆寺昭和資財帳調査概報 10』小学館
- (4) 大脇潔 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究



第 2 図 山崎城跡第 3 次調査採集丸瓦 (大山崎町 2021, No. 27 引用)



第 3 図 抜き取り縄 (大脇潔 1991 を再トレース、一部加筆)

論集 IX』(『奈良国立文化財研究所学報』第 49 冊) 奈良国立文化財研究所

(5) 大山崎町教育委員会 2021 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 63 集

(6) 森田克行 1984 「IX 屋瓦」『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』(『高槻市文化財調査報告書』第 14 冊) 高槻市教育委員会

(7) 中井均 1994 「織豊系城郭の特質について―石垣・瓦・礎石建物―」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会

(8) 大山崎町教育委員会 1997 「山崎城跡第 1 次調査略報」『大山崎町文化財年報 平成 8 年度』

(9) 大山崎町教育委員会 2019 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 55 集

(10) 大山崎町教育委員会 2020 「山崎城跡第 2 次調査」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 57 集

(11) 前掲註 5 文献と同じ。

2023・2024 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書

編集・発行 龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

発行日 2025 年 3 月 17 日

〒 600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1